

忙中有閑

写真・文＝貴堂 郁（本誌編集長）



コネクタに接続した故障診断ツール（写真奥）から手前の携帯電話に車両診断情報が送信される。ロータス九州には全国のロータスから説明会などのオファーが殺到している（7月4日・大分市の大分東洋ホテル）

第57回 整備業界に救世主 ロータス九州が開発した画期的システム

久々に興奮を憶えた発表会だった——。それは大分市のホテルで行われた全日本ロータス同友会（以下、ロータス）の九州ブロック大会でのことだった。

プレゼンテーションを行ったのは、九州および沖縄地区の同友174社で組織するロータス九州㈱。

間違いを恐れずに言うならば、カーメーカーの車両情報への囲い込みに対抗しうる手段が、全国で初めて具現化する、そんな画期的な発表会だった。

近年、クルマは電子部品の塊となった。部品一つ交換するにも車載式故障診断装置（OBD）に対応した診断機（モバイルスキャンツール）がなければ、これからの車の整備は出来なくなるとされる。車の修理屋が車に手を出せない。これでは淘汰されるのを待つより仕方がない。また後戻りできない安全性確保を掲げて、アルミホイール一つ、オーディオ機器一つ外すことも出来なくなる今後の車作りを考えれば、この状況は整備業者だけでなく、用品業者も含めアフターマーケットにかかわるすべての会社におけるゆゆしき問題である。

ロータス九州はかねてより、所属する車両電子情報有効活用研究会のグループのメンバーと共同でOBD IIプロジェクトを立ち上げ、故障診断ツールの共同開発を進めており、この秋口にもその商用化に踏み切る計画だ。

ロータス九州が開発した故障診断ツールは、携帯電話網を利用することにより、スキャンしたデータをセンタ

ーサーバーで一元管理することが出来る。九州・沖縄地区のロータス店はどこでも顧客の診断履歴を共有し、その履歴に基づいた適切なサービスを提供することが可能となる。故障診断機というよりは診断データの発信機という言い方が近いかもしれない。

これが全国1600社のロータスグループに波及すればどうなるか。自動車メーカーを凌駕する膨大な車両情報が蓄積されるようになる。

蓄積されたデータは、このメーカーの、この型式の、この年式の車のこの故障は、いつ頃、このパーツが原因で起こりやすいという傾向を導き出す。こういう情報を掴んでいけば、故障箇所もスピーディに、しかも高い確率で把握出来るようになる。必要な部品を調達しておけば、タイムリーな対応も可能になる。

町の一整備工場が、国内自動車メーカー8社が持つ最新の車両情報と同等の情報を、ビジネスに生かせる日も夢ではない。

なおこの九州発の試みは今、全国のロータスに波及し、各地のブロックからセミナー依頼が相次いでいる。

惜しむべくはこのデータ活用がロータスグループ内に限られることか（129頁に関連記事）。